



スポーツ選手の国際化

■スポーツ選手の存在

2016年10月に、女子レスリングでオリンピック4連覇を達成した伊調馨選手に国民栄誉賞が授与されました。同賞は、本塁打世界記録を達成したプロ野球・王貞治選手を称えるために1977年に創設されたものですが、以来、23の個人と1団体に授与されてきました(2016年12月現在)。そのうち、右の表に示すように、王貞治氏に続き、柔道の山下泰裕氏や女子マラソンの高橋尚子氏、最近では野球の長嶋茂雄氏と松井秀喜氏などスポーツ関係者の受賞は10名の選手・監督、そして女子サッカー・なでしこジャパンの1団体と、実に半数近くを占めています。このように、スポーツ選手は、いつの時も国を代表する存在であり、特に子どもたちにとってはヒーローであると思われま



■憧れの職業

毎年春に株式会社クラレが小学校に入学する子どもとその親を対象に実施している「将来就きたい職業」[就かせたい職業]の調査結果によると、子どもたちが将来就きたい職業は、男子では1999年の調査開始以来18年連続で「スポーツ選手」が第1位となっています。そして、スポーツ選手の内訳を見てみると、サッカー選手が58.8%・野球選手が21.3%と近年のサッカー人気を伺い知ることができます。(ちなみに、女子では「ケーキ屋・パン屋」が18年連続で首位となっています。)また、同調査の男子児童の親が「将来就かせたい職業」においても、「公務員」・「医師」と合わせてスポーツ選手は毎年上位に挙げられています。国際サッカー連盟(FIFA)には、オリンピックの出場国数を上回る208の国と地域が加盟していることからわかるように、サッカーは全世界で親しまれているスポーツです。日本でも1993年にJリーグが誕生し、日本代表も1998年のフランス大会から現在まで5大会連続でFIFAワールドカップに出場しています。Jリーグが誕生するまでは、日本では長らく野球が男の子に一番人気のスポーツであったことから、この結果を見て、時代の変化を感じる人も多いのではないのでしょうか。

■スポーツ選手の海外での活躍

「巨人・大鵬・卵焼き」。昭和の時代(特に昭和40年代)、子どもたちに人気のあったものの代名詞として使われた表現です。この原稿を書くにあたり、「現代ではその3つが何にあたるだろう?」と思い、インターネットで調べてみると「サッカー日本代表・ピカチュウ・ワンピース・妖怪ウォッチ・イチロー・田中将大・錦織圭・本田圭佑・長友佑都・ハンバーグ・パスタ...」。つまり、昔と比べて娯楽が圧倒的に増え、文化が多様化している現代においては、誰もが好きなものを少数に絞ることは難しいようです。しかしながら、先に挙げた人気のあるものに共通して言えることは、分野を問わず「世界を舞台に活躍している」ことがわかります。ワールドジャパンの一つとして数えられているように、日本の漫画やアニメは海外において高い評価を受けています。ここ数年は日本でもハロウィンの仮装が注目を集めています。海外に行くとフェスティバルや花火大会で仮装をした人をよく見かけ、その中には必ずと言っていいほど日本の漫画やアニメのキャラクターのコスプレをした人を目にします。中には、「それ、何のキャラクターだっけ...。」というものも。また、サッカー漫画のキャプテン翼を読んでサッカーをはじめたという世界の一流プレーヤーも少なくはないと言われています。日本の漫画やアニメの人気は我々の想像以上であり、大変驚かされます。野球では1995年の野茂英雄選手、そしてサッカーでは1994年の三浦知良選手を筆頭に、日本人スポーツ選手の海外進出が本格的に進み、近年では日本で活躍した選手が海外のチームに移籍することも珍しくはなくなりました。彼らのプレーを間近に見られなくなることは寂しいことですが、テレビなどのメディアを通じてプレーのみならず、その国の雰囲気や文化、言語などを知ることができ、海外がより身近に感じられるようになったと思われま

■スポーツを通じた外国文化の理解と言語の学習

スポーツ選手の活躍を機に海外の文化に興味を持ち、より深く理解するためにはその国の言語を学習する必要性を感じている人も多いのではないのでしょうか。私自身、大学時代に第二外国語が必修であったため、ドイツ語を選択し勉強しました。当時の私は、「ドイツ語なんて、今後の人生において使う機会はあるのか?」と思いながら、半ば強制的に勉強させられていましたが、今となっては「あの時、もっと真面目に勉強していればよかった...」と後悔しています。今日では、インターネットの動画サイトなどを活用することにより、国内にいながら他言語に触れる機会も飛躍的に増えました。英語だけではなく、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、韓国語...とインターネット上では様々な言語が飛び交っています。今後、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催にむけて、日本の社会はますます国際化が進むと考えられます。また小学校においても外国語(英語)の必修化および教科化が始まっています。スポーツ選手の活躍を通じて子どもたちは言語や外国の文化に親しみ、大人たちはこれを機に改めて外国語の学習に挑戦してみるのもいいのではないのでしょうか。



サッカーW杯開催期間中のドイツの街中 (2014年6月)

スポーツ関係での国民栄誉賞受賞者一覧

受賞者	競技	受賞年
王 貞治	野球	1977年
山下泰裕	柔道	1984年
衣笠祥雄	野球	1987年
秋元 貢(千代の富士)	相撲	1989年
高橋尚子	マラソン	2000年
2011 FIFA 女子ワールドカップ 日本女子代表	サッカー	2011年
吉田沙保里	レスリング	2012年
納谷幸喜(大鵬)	相撲	2013年
長嶋茂雄	野球	2013年
松井秀喜	野球	2013年
伊調 馨	レスリング	2016年

響育



スポーツ科学をもっと身近に感じていただくために

人間開発学部 健康体育学科 川田 裕樹



今年度のスポーツフェスティバル(以下、スポフェス)において全体の取りまとめ役を担当することになり、他の教職員に助けをもらいながら構想や準備をすすめていただきました。今回のスポフェスの構想~準備で、特に重視したのはテーマ・企画の設定についてです。たまプラザキャンパスの近隣の方々に人間開発学部をもっと知っていただくことを目的に、「スポーツ科学をもっと身近に」をテーマとして「体力測定・評価」「動作解析」「ニュースポーツの体験」など、大学での学びや専門性を前面に出したものとすることとしました。テーマや企画については地域の

方々に喜んでいただけるだろうという自信があったものの、このような内容のスポフェスを行うのは初めてであったため、来場者数やその年齢層がわからず、その点が大きな不安でした。しかしながら、学生達の準備~当日の努力のおかげで老若男女、300名近くの方にご来場いただき、楽しんでいただくことができました。スポフェスを通して、スポーツ科学がより身近になったのではないのでしょうか。1年後も、より進化したスポフェスを開催したいと思えます。ご期待ください!

恋愛とスポーツ

人間開発学部 健康体育学科 備前 嘉文



スポーツの世界では、選手を競技に集中させるために、あえて「恋愛禁止」を決まりに掲げるチームもあると聞きます。特に強豪と言われる女子の高校のチームにその傾向が強い気がします。確かに、多感な時期にオシャレや異性など、余計なことに気を取られて欲しくないという監督やコーチの気持ちもよく理解できます。しかしながら、スポーツのみならず、昨今必要とされている人間力の向上に恋愛は大変重要な役割を果たすと思われま。それは、恋愛をうまく進めるためには、(忍耐も必要ですが...)相手が何を考えているかを理解することが不可欠だからです。「どのようなプレゼントをあげれば相手は喜んでくれるか?」

と「どこにパスを出せば相手は取りやすいか?」を考えることは、場面は違えども、根本的には同じマーケティングの発想に通じています。私が専門とするスポーツマーケティングの分野でも、スタジアムにたくさんのお客さんを呼ぶためには、「人はなぜスポーツをするのか?」や「どのようなイベントを提供することで、より人はスポーツに興味を持ってくれるのか?」を考えなければいけません。草食系と言われるように、今の若い世代の人たちは恋愛に対して奥手だと言われますが、恋も遊びも勉強もスポーツも、自分からどんどん積極的にいろいろなことに挑戦し、そこから多くのことを学んでもらいたいと思えます。

ぜひ
ご相談
ください

- これから運動を始めようと考えている。
- 今、行っている運動が適切なのか分らない。
- 今の体力レベルを知りたい。
- 定期的に健康チェックを行いたい。

個人でも団体でもOKです。
まずは、お気軽にご相談ください。
コースによっては、料金がかかります
●登録料500円、測定料300円~



「第2回地域交流スポーツフェスティバル」が 開催されました

11月23日に本センター主催で地域交流スポーツフェスティバルを開催しました。昨年は悪天候のため縮小開催だったこの催しですが、今年は無事開催することができました。当日は、気温が下がり真冬のような曇り空の下、300名近い方々にご来場いただきました。

「スポーツ科学を、もっと身近に」をテーマに、地域の皆さんに自分の体や健康のことについて知り、誰もがいつまでも楽しくスポーツを行うきっかけを作っていただきたいという思いでスポーツフェスティバルを運営しました。開催にあたっては、企画立案から事前準備、当日運営まで人間開発学部生の約65人が携わりました。今回は、4つのブースに分かれてさまざまな体験をしてもらいました。それぞれのブースでやったことや、その様子について報告いたします。

「知っておきたい自分の体力」

普段自分の体力レベルを知る機会が少なく、特に高齢者にとっては健康に強い興味・関心があることなどから、川田ゼミでは体力測定ブースを設けました。ここではおなじみの体力テストの他に、落下棒反応や椅子立ち上がりテストなど珍しい項目も用意しました。当日は、幼児から高齢者まで多くの方に足を運んでいただき、親子や友達同士で楽しんでいました。今回のスポーツフェスティバルを通して、どのような測定項目を設置するのか、評価基準はどうすれば良いのかなど準備で苦労しましたが、体力測定についての知識や、幼児や児童に対しての関わりを学ぶことができました。



人間開発学部健康体育学科3年 わたなべ しゅうぞう 渡邊 修三

落下する棒をつかむテストで敏しょう性を評価しました。



「最新のスポーツ科学を体験！」

私たちの動作分析ブースでは、100名以上の方に足を運んでいただきモーションキャプチャー体験と重心動揺やジャンプ力の測定を行いました。「楽しかった」や「勉強になった」などのお声をいただいた一方で、私達の知識や用意したデータの不足により十分なフィードバックを行うことができなかったなどの課題も残りました。次の開催ではこれらを改善し、より多くの方にもっとスポーツ科学を身近に感じていただけるイベントにしていこうと思います。



人間開発学部健康体育学科3年 すずき まゆ 鈴木 万友



目を閉じて片足立ちをしているときのふらつき度合いを測りました。

「健康への第一歩」

私たちは体の状態を知ることのできる身体組成と骨密度を測るブースと、栄養を考えての食の大切さを知ってもらうための栄養指導の3つのブースを用意しました。お越しいただいた地域の皆さまが、楽しんで計測していただけるよう学生一同努力いたしました。年齢関係なくたくさんの方にお越しいただいたおかげで地域の方との交流もでき、とても貴重な体験が出来ました。

今回学んだことを生かし、今後の活動へ繋げていきたいと思ひます。

人間開発学部健康体育学科3年 だいご まさき 醍醐 将



骨密度を測って、骨が丈夫になるような栄養指導も行いました。

「今ここにしかできない経験を！新感覚ニュースポーツ！」

私はニュースポーツブース(サッカーボウリング、シャッフルボード、ストラックアウト等)を担当しました。種目決めやそれぞれのルールや看板の作成など、常に期限ぎりぎりになってしまいました。自分で当日何が必要かを考え、余裕をもって準備すべきだったと思ひます。

当日はスタッフも来場者の方も楽しそうで活気の溢れるブースとなっていたのがとても嬉しかったです。今回得られたデータをもとに地域の方々に対して運動教室を開くなどできたらいいなと思ひます。

人間開発学部健康体育学科3年 さとう ともり 佐藤 知訓



普段あまり触れることがないような種目を、親子で楽しんでいただきました。

アメリカ 健康事情

vol.2

選択と自由

林 貢一郎(健康体育学科)

当センター委員である林貢一郎准教授が、国外派遣研究員として、アメリカのテキサス大学に派遣されています。前号から、アメリカの最新の健康事情についてお知らせをしています。今回はその第二弾です。

ハンバーガーが主食、ピザがおやつ、野菜は揚げた芋、1リットルサイズの炭酸飲料(アメリカでは総称してソーダという)飲み放題、ダイエット〇ーラは健康飲料…それがアメリカ式食生活。実際には選択肢があるのですが、食文化が大きく肥満に代表される不健康につながっていることは確かでしょう。例えば、私の溺愛する娘は現地のElementary schoolに通っていますが、スナックタイムなるものがあり、毎日おやつを持っていきます。娘はバナナとかリンゴなどの果物をよく持って行っていますが、周り子達はいわゆるスナック系のお菓子ばかりだそうです(どおりで大学の研究室でもアメリカ人はスナックをよく食べる)。さらに、昼食は給食ではなく、弁当 or カフェテリア(おシャレか!)でバイキング(\$2.5/食)です。バイキングの内容は、子どもが選択することになりますので、どこまで健康的かという疑問ですね。とにかくアメリカは選択と自由が好きな国です。大人はよいとしても、子どもの選択を学校や親がどこまで認めるべきなのか?そんなことも真面目に考えたりしながら、今日も自由に肉をほおぼります(大人なのでいいんです)。



息子は、Billieさんとリンゴを頼ります



バランスシートもあるにはあります



親も食べるができます